

都内で書道教室主宰 佐下橋さん

歌人梅内さんと「八戸コラボ」

書くべき歌 出合えた

珠玉の31音を端正な筆致に込めて。八戸市出身の歌人、梅内美華子さんの短歌に魅せられ、東京都荒川区で書道教室「桜華会」を主宰する八戸育ちの佐下橋司節（本名・敬子）さん（59）がコラボレーション作品を完成させた。「現代のすてきな歌を書て表現することに、自分の思いを注ぐべき方向性がある」。見いだした創作の可能性に心を躍らせる佐下橋さん。手がけた作品がこのほど都内で開かれた書展に並んだ。

（藤野武）

作品、展示会に

青森県立八戸西高で書道に傾倒し、国学院大栃木短大では天皇陛下の祐筆を務めた中島司有さん（故人）に師事した。そんな佐下橋さんが好んで作品に書き上げるのは、与謝野晶子をはじめとする明治、大正時代の歌人。書道部講師

を務める都内の学校でみずみずしい感性を放つ中高生と接する中、近年は逆に「若い人が共鳴できる歌を書いていかないと」との思いを強めていた。

梅内さんの作品と出合ったのは昨年10月、知人に紹介された詩集だった。

「臨場感が漂っていてスタイリッシュ」。実はそれまで、梅内さんの存在を知らなかった。ましてや同郷という共通点も。「点同士だったお互い」が一つの線で結ばれた。私の書くべき歌が見つかったと思つて」

高校時代の恩師、米田巧さんに連絡を取つて梅内さんとなつたりが、メールと手紙でやりとりが始まった。作品を仕上げ、3月から4月にかけて銀座で開催された二つの展示会に出展。会場に足を運んだ梅内さんとも初対面し、感謝の気持ちを伝えられた。「書道と短歌それぞれの魅力が重なり合つて広がりが生まれる。一人でも関心を持つてくれる若い人が増えたら」と期待する。

3歳から高校までを過ごした八戸に、新しい美術館ができたことを最近知った。「そこでもいつか短歌とコラボしたイベントを開いてみたい」。佐下橋さんが飽くなき探究心をのぞかせた。

コラボレーションした作品の前に並ぶ佐下橋司節さん（左）と梅内美華子さん＝4月、東京・銀座（佐下橋さん提供）

